令和６年度　幼児教育研修（年齢別担任研修０歳児・第１回）
「子どもの発達と保育者の関わりについて」
日時：令和６年５月２２日（水）１５：００～１７：００
会場：足立区勤労福祉会館
講師：彰栄保育福祉専門学校　　専任講師　山梨　有子　氏

0歳児はどんな発達をしているの？

4か月頃までに
感覚を通して外界を認知

○周囲の人やものをじっと見つめる。
○声や音がする方に顔を向ける。

4か月頃から
探索活動が活発　基本的信頼感が育つ

○自分の意志で体を動かす、移動する、身近なものへの興味
○自分の欲求を体の動き、泣き、喃語で表現

この時…

応答的に関わる大人との間に基本的信頼感（安心感）を育んでいく。

6か月頃から
愛着関係が強まる

○自分に安心を与えてくれる人が分かる。
○見知らぬ相手に人見知りをする。

9か月頃から
言葉によるコミュニケーションの芽生え

○欲求や自分の意志を指差しや身振りで伝えようとする。
○子どもの言葉に一つ多く返すことが大事である。
例：「ブーブ」→「ブーブ、はやいね」

愛着
《人間関係の基礎》

○愛着の対象は乳児が選んでいる。
○応答的に関わることで形成される。
○**「何かあれば助けてくれる」という確信をもてる環境をつくることが重要。**認識すると、自分はかけがえのない存在ということを学んでいく。

喃語
《コミュニケーションの芽生え》

○**心の発達、言葉の獲得に不可欠。**
○**発したら必ず応答的な関わりを**していく。指差しがあることで単語を知っていき**とても大切な関わり**となる。
○単語が出始めたら、**ひとつ多く返していく**ことを意識することで語彙力の幅が増えていく。
例：「ブーブ」
→「赤い　ブーブだね」

探索
《確かめる器官として機能》

○目に入るものを、つかむ、振る、叩く、引っ張るなど、**その物の性質を確かめる。**
○**安心できる場所を確保することで興味をもって関わるようになる。**

育ちには道筋（順序性）があり、発達の特徴はあくまでも目安である。一人一人の発達をよく見て理解したうえで、育ちの方向性を考え、子どもの育ちを支えていく。

発達を理解するための3つの視点

身体的発達	社会的発達	精神的発達
『自分』	『ひと』	『もの』
健やかに 伸び伸び育つ	身近な人と 気持ちが通じ合う	身近なものと関わり 感性が育つ

まとめ

- 緩やかな担当制保育の中で応答的に関わり、子どもにとって楽しいことを積み重ねていく
- 安心できる環境の下、「やってみたいな」と乳児も学んでいるという認識をもつ
- 保護者と共に保育する視点をもつ（家庭との連携・保護者支援）

クラスの連携

○「報・連・相」や子どもの様子をよく見ることが大事
➡少しのことでも共有することで、子どもの様子が見えてくる
○聊頼（りょうらい）の関係
➡頼る、頼られることを日常の中でお互いしていると、自然と連携されていく
○相談された時は、その後に「どうだった？」と返していくことが大事

子どもの気持ちに寄り添う時は、大人の気持ちもしっかり向き合いましょう。泣いている子に気持ちを寄り添う時、抱いたまま他の事に気を向けてしまうのは、その子の気持ちに寄り添っているのでしょうか。
こんな時こそクラスの連携が大切です。声を掛け合ったり、アイコンタクトなどで知らせたり、保育者がその子と寄り添える場や環境を作れるようにしていく連携プレーが大切です。

研修生の報告書より

0歳児は愛着関係を築いていく中でも、保育者や園の環境などを敏感に感じ取ると思う。一人ひとりの子どもを丁寧に受け止めて、保育者と話し合いながら環境を作っていくことがすごく重要だと感じた。

↓

指差しなどの仕草を通して、気持ちを伝えようとする。子どもの気持ちに共感して言葉を返すようにしていった。まだ言葉は出ないが、笑顔を見せるなどの姿が見られ、楽しくコミュニケーションを取ることができた。更に愛着関係を築けた実感があった。

安心できる場を獲得することで子どもは身近なものと関わり、楽しさを感じると「やってみたい」という意欲がわいてくる。その意欲が叶うことで、様々なことを身に付けていく。保育者は子どもと応答的に関わる中で、一人一人の興味、関心を理解し、子どもに育ってほしい方向性を考えて環境に取り入れていくことが大切である。